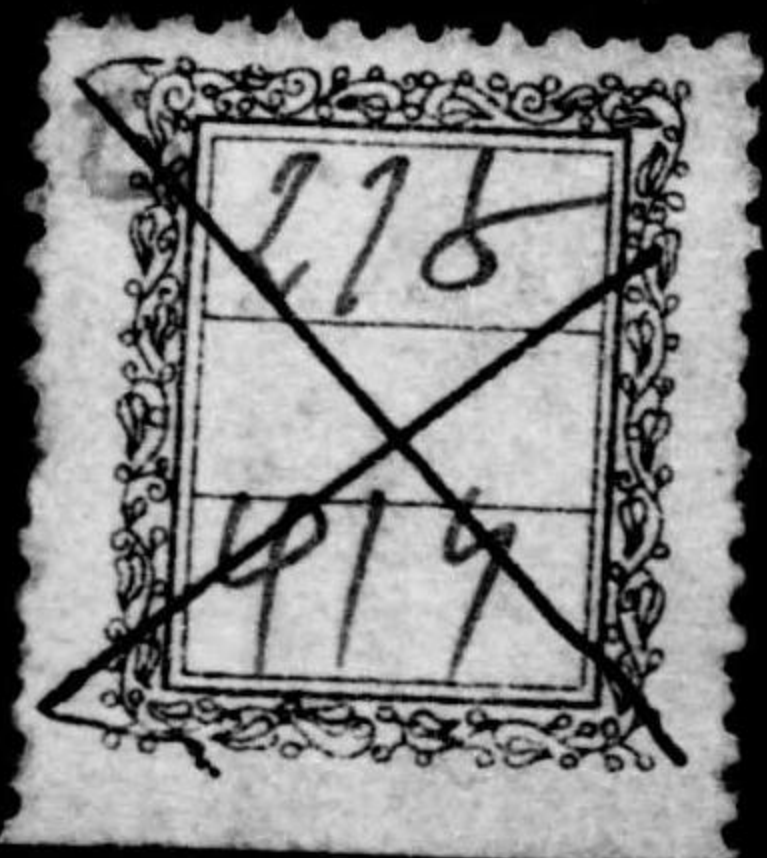


特 101

52

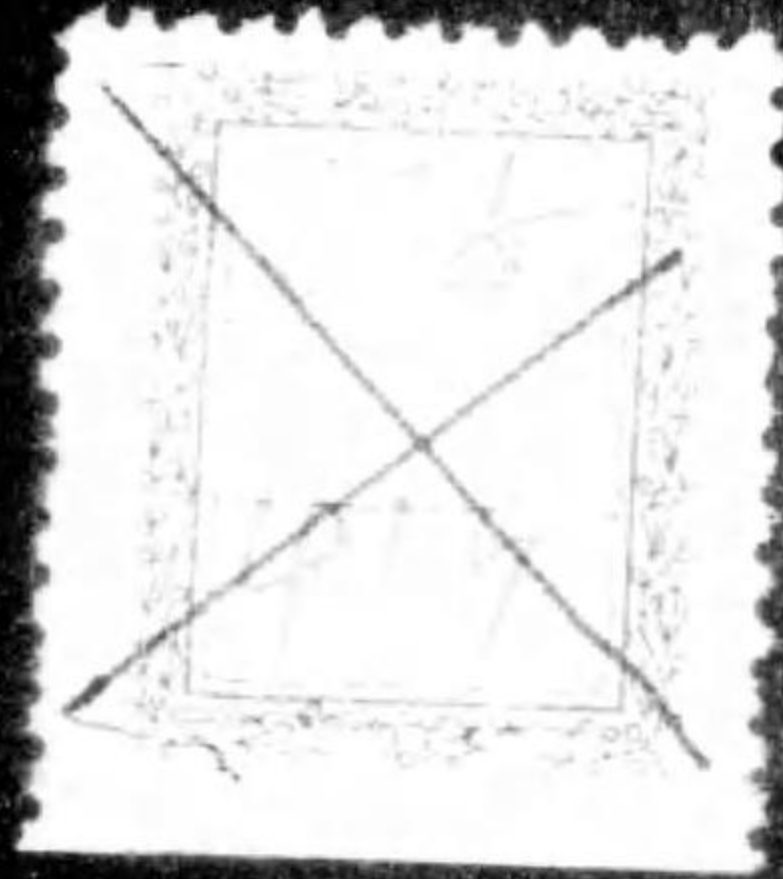


始



懷妊及避妊の秘訣

特選  
秘訣



特101  
52

序

古人曰く三年居を同ふして子無ければ即ち去る、  
 又曰く子無きを以て不孝の第一となす、蓋  
 し之れ家族制度を尊重するの我邦に於ては決し<sup>2</sup>  
 て閉却すべからざる家憲の一要素なり、証  
 往昔諸侯か二三の側室を置かれしは、現今<sup>4</sup>或<sup>10</sup>  
 者の如く漁色の爲に妾を蓄ふるは全く其意を<sup>4</sup>  
 異にして、血統の斷絶を防かん爲の用意なり  
 尙此意味に於て徳川氏の掟に、三代婿養子を以  
 て家を襲がしむれば其家を斷絶すべしとせられ



証は決し2  
 或10  
 4  
 内交

たり、かくの如く血統を重んじたるは、祖先の  
強烈なる忠節を永久に傳統せしめんとの精神的  
政策なりき、今や科學の進歩と共に合理的に懷  
妊避妊の法を講述せらるゝは、國家民人の爲實  
に至慶に堪へざるなり、聊か所感を記して序と  
なす。

大正四年立秋之日

早川益甫

## 目次

- 一 發刊の動機……………一
- 一 女子天職の開始……………八
- 一 婚姻と其選擇法……………一二
- 一 妊娠と生理的作用……………二三
- 一 懷妊と避妊の兩秘訣……………三二
- 一 分娩日の算定法……………四六
- 一 男女の豫知法……………四九
- 以上

# 懷妊及避妊の秘訣

月嶺仙史之著

## ●發刊の動機

文明の光は八紘を照して、人類の福祉を向上増進し、科學の威力は雷霆を驅りて、地上に車を馳せ、曾ては天人の外に空中を翔るの術なしとして羨みしも昔の夢、今は天空を自由自在に飛翔するの機体を製出するに至りましたる等、其進歩發展は實に精妙を極めましたので、世を擧げて科學萬能となり、最早人

智の企て及ばざる處のものはないと、誇るに至つたのでありま  
 すが、併し仔細に之を吟味すれば、這は全く半面の事實であり  
 まして、他の半面には原始時代より未だ一步も其舊体を改善す  
 ることの出来ない事實も決して少くない様であります、今其一  
 として此處に申し上げますのは、人類の生殖作用がやゝもすれ  
 ば偏重偏輕に流れまして、常に其不幸に泣く人の多きを矯むる  
 の方法、更に一層之を適切に申しますれば、此處に百万の富を  
 積んで之を譲るの子なきに泣く人もあれば、榮位榮爵を拜戴せ  
 る身にして之を襲がしむべき子寶を持たざるため、むざ／＼之  
 を他人に與ふるか否らざれば一家を廢絶するの外なしとて、深

夜窃に其薄俸を悲むの人もあるかと思へば、其傍に財なく食  
 乏しくして不幸薄命を嘆ずるの家に、却つて子寶のみ繁殖して  
 彌が上に若痛を増して居る人もあります様な、不幸不平を醫す  
 るの良法の未だ發見致されませんのは、誠に遺憾千萬の事では  
 ありませんか。其處で何時も思ひ出しますのは、我國の歴史を  
 見るたびに、あゝ、殘念と溜息を洩しますのは、不世出の大英  
 雄豊臣秀吉に三四人の男子がありましたならば、まさか、二代  
 にして大阪の落城、子孫の斷滅といふ如き、悲惨の末路ではな  
 かつたであるまいかと、之に反して徳川家康公は數多の子寶を  
 持たれましたるため、根底深くして枝葉榮え、十五代は愚か今

も尙世に時めきて一門宗族の廣きこと、高きは公侯の名爵より伯子男爵を拜せる者のみにても三十余家の多きに及び、其他の宗族數ふるにいとまあらずとは、之も子寶の繁榮が産みし結果でありますまいか、されば世人が子呼んで寶と申しますのも矢張この邊から出來た言葉でありますまいか、あゝ、人として持つべきものは子寶にて之に上越す富はなし。

さても古人が『まゝにならぬが浮世の習ひまゝになるのは米ばかり』と、嘆息せられましたる如く、子寶は吾人々類の智的範圍で絶体に調節の出來ないもので所謂天の賜物、神様のお授けを待つより外に道はないのでありませうか、否決してさう相

場が極まつたものでもありますまい、けれども何分に此研究は男女両性の秘密作用と、秘密關係の際に起るの現象でありますから、至難中の至難なる大問題で、吾人々類の最大希望であるとは申しながら、他の科學の如く公然之を研究するの余地なく會々ありとしまして何となく卑猥に渉る如き觀ありますので世を憚り、人を憚りまして、終には之を放棄するに至る様なわけで、一向に改善の曙光を認められなかつたのでありませう、併しながら、幾千年間の問題でありますから、時に、其研究説や經驗説を公表したのも満更ないでもありません、中には随分面白き名説もあれば、又頗る肯綮に價するの高論もある様で

あります、實は著者も屢々この問題に觸れて窃かに之が研究をしたのでありましたが、中間他に妨げらるゝ事のありましたのでしばらく之を閉却して居りました處が、突如としてこの問題に關する頗る奇抜なる題號を冠したる書の公刊せられましたる由を聞きまして、大に喜び、急ぎ其書を手にして之を披き見ましたところ、何と又驚いたの驚かないのではありません、全篇一の理據なく、經驗説もなく、カード式など、稱して十五才より五十才迄の三十六年間を三十六枚の紙に年齢によりて妊娠日を一年の中四十日から四十二日迄であると暴斷して其月日を明記した者である、併して其他の二百二十余日は悉く不妊日

であると憚る處なく斷言して而も其理由を少しも示し能はざる全くの出鱈目である、換言すれば幾才の女は、何月何日と何月何日とが妊娠日と定まつて居る者であるなど、いふ無稽極まる寐言同様の者にして、之を正味にすれば二十頁たらずの一小冊子價五十錢なりとは、之ぞ世にいふ羊頭を掲げて狗肉を賣るの輩にして、世を欺き人を害するの尤も甚しきしれものではありませんか

著者はこの憎むべき惡辣なる奸手段に遇ふて、且つ呆れ且つ悲むのあまり、多年研究調査せる一部を世に公にしまして同憂の士に頌ち、其參考に供して幾分にも不幸不平を救ふこと



が出来ましたならば、此上もなき自他の幸慶かと存じ、茲に私見を吐露するに至つたのであります。

### ●女子天職の開始

西人曰く女子は國の母なり、と、然り、この地球上に生存してゐます處の十六億の人間中、上は尊き帝王より英雄豪傑を始め、學者宗教家はては田夫野人に至るまで、誰かこの女子の胎中より匍へ出ざるもの一人としてありますまい、恁の如く女子が自然に有せる任務を名づけて女子の天職と申したのであります、されば此天職者の健全は直に國民の強弱に正比例し、又

其賢不肖は延て國家の消長に關するといふ大問題でありますから凡て女子たるもの、責務や重且つ大なりといはなければならぬのであります。

さて此女子の本能的天職は如何なる時に於て始めて發現するものであるかと申しますれば即ち女子が生育して十四五才（熱帯地方の女子は十二三才）に達しますれば、此處に春情發動して局部の出血を見るに至るのであります、之が抑も女子の本能的生殖機能と妊娠作用との可能となりしことを表現したのであります、俗に之を女になつたとか花が咲いたとか申しまして、土地により大に之を祝する處もあります、兎に角この現象は女

子の本能なる天職を盡すべき第一の序幕であります、之より普通の女子は三十年以上三十五六年間、妊娠期を除くの外は絶えず経續して四週間毎に三日乃至七八日間位つゝ行はるゝものでありまして、其出血量は人によりて差異ありますが五勺乃至一合五勺位の範囲であります、而して其間隔は稍月の一廻轉と並行して行くのでありますから（實際は月の運行より二日間宛早きものでありますから今月の二十日に月經の開始を見ますれば翌月は十八日其翌々月は十六日となるのであります）之を名づけて月經又月役、或は月水、經水、又さわりなごとの種々の稱呼があります、今一步を進めて更にこの月經なるものゝ生理的

作用の一斑を申し述べますれば、女子の春情發動と同時に、内部に於て排卵作用といふものが起るのであります、即ち卵巢中に包藏せられてゐます處の、卵子といふものが一定の成熟をなすと自然に卵巢を離れて喇叭管に入り、夫より尙一層進んで子宮内に出づるの作用であります、この時に當り一方には子宮内面の全部に分布せられてあります處の、血管の細胞が充血肥大して遂に破裂し喇叭管より流れ來れる處の卵子と抱合して外界に排出せらるゝに至るのであります、されば此排卵作用が主でありまして出血は其副作用なることは尙後に詳説いたします。

就てこの出血液は、卵子液との抱合物でありますから、普通

の血液とは頗る相違して、粘り氣の強き暗褐色を帯べる濃厚の液体であります。

猶此處に一言を添へおきますことは、本問題の解決に余りに要用ならざる局部の名稱や、其機能を一々説明致しませんのは却つて複雑に流れまして一般人をして其要領を得るに苦まじむるの恐れがありますから、特に之を省畧したのであります、讀者之を諒せられよ。

### ● 婚姻と其選擇法

古歌に曰く『日の本は岩戸かぐらの始より女ならでは夜があ

けぬ國』と、女子は十四五才に達しますれば、月經を開始して生殖機能の可能となれることを表現しました様であります、縮つて全身の状態を査察しますれば、其生長發育は未だ完成して居らないのでありますからこの女子の天職を盡すの大任には堪へ難きものと思考せらるゝのであります、勿論例外なる早熟者のないでもありませんが、普通の女子は大抵十八九才、男子は二十二三才を以て始めて身体の生長を完了するものであると生理學上畧一定して居るのでありますから、この年齢の以後を以て女子の天職を營むべき婚姻を行ふを尤も適當の時期と信ずるのであります、我邦の民法は満十四才を以て婚姻を許容せら

れてありますが、這は言ふまでもなく法律は凡て其最低限と最高限を規定してあるのでありますから、例外なる早熟者も甚しき拘束を受ざる様に其最低限度を満十四才とせられたのでありませうから、各人の誤解のなき様にと、一言蛇足を添ふる次第であります。

さて我邦に於ても以前は、稍早婚の弊がありましたから、惣領の甚六などといふ一種の綽號が出来たのでありますが、之は抑も母体の發育不完全なる處に、加へて精神の作用が尙更幼稚の域を脱しません時に生殖を行はれた結果でありまして、甚六君が胎中にありし時に受けたる胎教即ち感應が、又母体に伴ふ

て幼稚でありますか爲に、可憐なるかな出生後身体精神共に振はず、常に弟妹等の爲に壓倒せらるゝが如き傾きのありますのは、全く甚六君の罪に非ずして、母体の不完全に基因するの悪結果であります、开して其命數も又多くは早世を免れない様でありますから、尤も慎むべきは早婚であります。

然らば之か適當の生殖時期如何と申しますれば、男子に於ては三十才前後、女子にありては二十三才を最良と信ずるのであります、此年齢の時には兩者共に充分の發達を遂げて、身体精神の尤も旺盛を極むるの時であるからであります、夫より約十年間位は活動生々でありますから生殖上至大の好時期で

ありますが、更に進んで男女共に四十才を超えますれば生殖機能は次第に退行を始むるのでありますから、其後の産兒は又脆弱にして多く短命に終る様であります、世に未子の甘坊と申しますが、這は母体が精力の退行をなしたる自然の羸弱より生れた結果であります。

以上の所説によりて、母体の發育不完全なるとき、及び生殖機能の退行をなしたる後の生兒は、世界各国の統計上死亡率の最も多きことを證明して居るのであります、両者の不幸此上もないのでありますから、世人の夙に此處に留意せられん事を希望するのであります。

ておきます  
 今世界の各強國に於ける婚姻年齢の平均を掲げて参考にご供

國名	男年齢	女年齢
日本	二二年	一九年
露西亞	二五年	二〇年
英吉利	二八年	二五年
佛蘭西	三〇年	二四年
米國	三〇年	二五年
獨逸	三〇年	二六年

次に本章に於て尙一言を述べておきます事は、血族結婚の尤も

恐るべき弊害のある事と、倭小婦人の子孫に影響するの甚大なる事であり、前者は醫學の進歩と、人文の發達によりて、漸次其數を減ずるの模様あるは、幸慶に堪へざる事であり、尙從兄弟夫婦の如きは少しも障害なき者の如くに見做されて居ますのは、甚だ遺憾の次第であります、今此血族結婚によりて生じたる畸形兒の數は統計のあらざる爲明瞭ではありませんが、世界各國中我國を最となすとの事であり、彼の兎唇、贅指、盲者、啞者、白痴者、倭小者、其他種々の變形兒は皆其反影であるといふことであります、實に寒心すべきことではありませんか、夫から我國人も昔しは軀幹長大にして、男子は五

尺五六寸より六尺に近いものが多いやうでありました、即ち鎌倉以後、元龜、天正年間迄の、武具調度等を見ますれば、吾言の決して妄ならざることを知ることか出來様と思ひます、一徳川氏が天下の政柄を握るや、深く諸侯の反乱を恐れ、道路に關を設けて交通を不便ならしめましたるを以て、諸侯も又之に倣ひましたので、人々漸く糊着の風をなし、従つて血族結婚を助長し、又次第に短軀倭小の人を産するに至つたのであります、今我邦に於ける壯丁検査の平均身長を聞きますに、大正二年度の調査に據れば、五尺一寸二分強であります、然るに英米諸國の統計を見まするに、年々長大するの風ありまして、其

平均身長は男子五尺六寸八分、女子五尺三寸九分であります。併して我國の女子全体の統計はありますが、仮りに各種女學校の統計によりて見ますれば四尺九寸三分弱とは、あゝ、又情なき事ではありませんか。

之を要するに、婚姻は人生の一大典儀でありまして、一家一門の安危榮辱の分るゝ處、其當を得れば家内和合して子孫繁榮の基となり、之に反すれば家庭に風波絶えずして遂には身をも家をも亡ぼすといふ、實に恐るべき結果を招くのでありますから、古人が夫婦和合せざれば六十年の不作に逢へるが如しと言はれたるを見ましても、一身の不幸、一家の損失の如何に深刻

なるかを思ひて、急がず迫らず、十二分の考慮を盡して、選擇を誤らない様にするこそ肝要と信するのであります、今左に選擇に關する要項を申し述べておきませう。

一 血統を選び、精神病系、結核病系、及び其他の遺傳性病系を避くること

一 容顔よりも専ら体格に重きをおきて、瘦身短軀等は成るべく之を避くること

一 早婚を慎み男子にありては二十二才以後、女子にありては十八才以後の、身体生長の完成後に於て之を行ふこと

一 血族は四等親以内を避くべきこと、法律は三等親迄許容し

あれども、ここれは止を得ざる場合の最低限たることを忘る可わすらざること

一各自其業務によりて、趣味を同じくするものを選び、夫唱ふたへて婦隨ふの法に則り、互に背反せるの性格は堅く之を避さく可きこと

一身分の甚だしく相違せるは之を避く可きこと、諺に「つりあはぬが不縁の基」で中間破鏡の歎を見るが如き程、兩者の不幸なるは非ること

以上は、其大要に過ぎないのでありますから、各個人が其一家一門の歴史に鑑み、現在の境遇に應じて最善の選擇をなさね

ばならないのであります、一時的なる快樂や、慾望のために身を誤り、禍を子々孫々に貽さない様に注意を拂ふ事を切望致すのであります。

### ● 妊娠と生理的作用

一休禪師の歌に曰く「女をば法の御藏といふぞかし釋迦も達摩もひよいくと出る」と、さて宇宙の萬象は悉く陰陽の二氣、即ち新しき言葉を以て之を説明しますれば、消極と積極との両端に支配せられて居るのであります、これを自然界にて申しますれば、天は即ち陽にして地は即ち陰であります、時を以て



申しますれば、晝は即ち陽にして夜は即ち陰である、次に火は即ち陽にして水は即ち陰であります、この陰陽の二氣が互に相働きて始めて萬物を生成するのであります、生物の如きは特に此二氣の感應を受けまして、最も顯者なる兩端の特異性を發揮しておるのであります、即ち美しき花にも雌花あり雄花あり又雌木あり雄木ありまして、兩者の吻合によりて始めて種子を生ずるのであります、更に進んで動物となりましては、牝牡となりて、陰陽の兩性を益々發揮するのであります、個様な次第であります、植物や動物には皆一定の繁殖期、又交尾期があるのであります、この以外には兩性の發動が決して起らないので

ありますが、獨り人類に至りましては、この制限が全くないのであります、只交接は他の動物の如くに直に妊娠となる場合と否らざる場合との相違があります、开は全く女子に屬するのであります、男子には全然拘束がないのでありますから、世に男子と生れましたる程幸福なる事はありますまい、三百六十五日何時として可ならざるなく、可として行はれたる事に生殖の目的を達せざる事はないのであります、然るに一方女子の受胎作用は生理上の自然的障礙があります、交接は直に妊娠となるといふ事が出来ないのであります、されば人々をして茲に疑を起さしめ、いかなる時が妊娠となり、いかなる時が不妊娠

となるやを解しかね、交接は只快樂を貪るの機能でありまして  
 生殖は其副作用なるが如くに、本能を顛倒せらるゝに至つたの  
 でありますまいか、序に此間の消息を洩したる神話の一を書い  
 て見ませう。

昔八百萬の神々が、出雲なる杵築の大社に集ひに集ひまして  
 神議りましませし時、先づ凡ての生類の繁殖交尾期を御定にな  
 りまして、其濫使濫用を御禁め遊ばさうと致しますると數多の  
 生類は之を洩れ聞きまして、吾先にと大社に参りまして、其御  
 決定を伺ひ奉りますれば、犬猫は春秋の二季じやと仰せられ  
 ました、次に馬來り壇下に嘶きますれば、春季一回どの御神宣

を下されました、處が馬は大に憤慨して曰く、われ今途に於て  
 家鼠に遇ひり其御沙汰を伺ひますれば、春夏秋冬の四季なりと  
 情々思ふに家鼠の如きはわたくしの目の中に入りても苦痛を感  
 せざる程の小動物なるに尙然り、吾輩の如き大動物は春夏秋冬  
 の四季は更なり晝夜兼行にても差支なかるべしと思ひましたる  
 に、之は又案外、如何にも偏頗の御所置ではありますまいか、  
 あゝ、残念じや〜と立髪を振立〜嘶き狂ひましたので、多  
 くの神様達も之には持て余し給へる處に、後ればせにのこ〜  
 辿り着きましたのは吾々人類の祖先であります、恐る〜神前に  
 進み出て恭しく拜禮して、さて私共はと伺ひますれば、神

々は最前より荒れ狂ひて猶止まざる馬の振舞に呆れ給へる時とて、あゝ、五月蠅勝手にせよとの御神宣でありましたから、吾祖先はすかさず、あゝ、有り難し勝手にせよとは、晝夜を問はず四季を論せず、都合の付きます勝手によい時に致すのでありませうとて、勇み喜びて引下りました、之より吾々は時と場所とを問はず勝手によい時に之を行ふの神許を與へられたものであるといふ事でありまして之も一には馬君のお陰によるのでありましたとは、何と又面白き神話でありませんか。

却説本問題の解決に最も重要な陰陽二氣の説明が大体すみしましたから、之から生理的方面の説明に移りませう先づ男子の

生殖機能から申しますれば（本説明に關係薄きもの又普通人の知悉せらるゝ部分は特に之を省略致しておきます）第一に主要なるものは睪丸であります、开もこの睪丸なるものは、無數の線状様の物が固く結び着けられて一の塊状を呈しておるのであります、この線状内に常に生殖の目的を達すべき精液といふ一種の粘液を蓄へて置くのであります、更に一層詳しく申しますれば、其粘液中に無數の精虫なる一種の生物がありまして、粘液はこの精虫を外部より包みて之を保護しておるのであります、して此精液なるものは男子の健康体には悉く備つておるのであります、花柳病等に冒されたるもの又は睪丸炎等

に罹りたるものは全くこの精液を失ふておることか間々ありま  
すから、之等の人々は絶体に生殖作用を営むことの出来ない一  
種の不具者となつたのであります。

次に此精液は、両性の交接作用によりて直に畢丸を出て女子  
の子宮内に送られます、此時子宮の關門にして平素緊縮してゐ  
ます處の腔部と申す者に他の障碍なき限りは除るに開口して精  
液を迎ひ入るのであります、さて此腔部とは子宮の内部に外  
氣又は汚物等の侵入を防ぐために設けられたる關門であります  
から、常に緊縮の特性を有つておるのであります、生理學上  
ては之を括約筋と申すのであります、かくて精液は恙なく腔部

の括約筋を通過して子宮内に入りますと、活潑なる自己の運動  
により更に進んで喇叭管に入る、この時喇叭管内に蠢動してゐ  
ます處の卵子と相會して、此處に始て陰陽の二氣相抱合して生  
体の原子となるのであります、卵子とは本論第一章女子の天職  
に於て大畧申述しました如く、卵巢内に於て一定の成熟をなし  
ますと自然に剝離して喇叭管内に出で來るのであります、然る  
にこの卵子が精液と會合せざる時は管内の旋毛運動によりて次  
第に子宮内に出づるのであります、子宮内に出づれば最早其用  
をなす能はざるに至るものであります。

夫から此喇叭管内に於て抱合しました處の生体の原子は、暫

時管内に留まりて稍長大となりたる後、始て子宮内に出て來り  
 まして其内面に附着し、母體より營養を採りて次第に生長し、  
 遂に完全なる人體を構成し、日經ち月満ちて外界に生れ出づる  
 のであります、序に此受胎後の事は皆人の知る處でありますか  
 ら煩を避けて其説明を省きます。

● 懷妊及避妊の秘訣

古歌に曰く『一滴の水萬物の靈と化す』と、前章に於て普通  
 妊娠の場合に於ける生理的作用の一般を畧説致しましたから、  
 今度は愈々著者が多年研究の持論でありまして、自ら一種の創

見と信じてゐます處の、必然的の懷妊と避妊との兩秘訣を申し  
 述ませう一体この兩秘訣を一時に合せ論じますのは、懷妊の反  
 對は避妊でありまして、避妊の裏は懷妊といふ離る可らざるの  
 問題でありますから便宜上之を一所に申し述べる事に致したので  
 あります、抑も妊娠又不妊娠とは、男女兩性の陰陽の二氣が能  
 く自然に合すると否とによりて定まるのであります、自然に合  
 すれば妊娠となり之に合せざれば不妊娠となるのであります、  
 如何にせば能く自然に合するやといふ事が即ち第一の問題なの  
 であります、其處で一寸お断り申しておかなければなりません  
 事は男女の兩性共に、健全にして又生殖機能にも少しの障害な

きものを標準として論ずるのでありまして、何れか一方に不健全の人あるとか又は其機能に故障ある者等は全く除外でありますから、左様御承知を願います。

却説此自然に合するといふ事は、男子には無關係でありまして、専ら受胎すべき陰性の女子にのみ存在するのであります、故に女子の生殖器が自然に合致してゐますときは、例令其人の意志が妊娠を欲せざる場合でありまして往々受胎するに至るのであります、少しく極端の例ではありますが強姦の如き忌べき惡むべきの事を敢てせられまして、其人の猛烈なる拒斥と反抗心のあるに拘らず遂に受胎するに至るが如き例なきに非るを

見ましても、受胎作用即ち妊娠なるものは女子の生殖機能が生理的自然に合致してゐるや否といふ事に依て決定せらるゝのであります、然らば即ち女子の生理的自然とはいかん曰く、此處か著者の創見と自信してゐます處の秘訣であります、受胎作用の第一機關たる子宮の關門を守る括約筋の弛張が此大問題を決するの唯一の楔子であると斷じたのであります、個様に簡單に申しますれば、何だ夫はつまらない創見處か、陳腐の説じやないかとの異論もありませうが、底に一種の妙諦があるのであります、されば一層之を具体的に説明しますれば、开も此括約筋は外に對しては外氣又は汚物の侵入を防ぎ、内に對しては經

水の漏洩を防ぎ居るの妙機でありますことは、前にも一寸述べ通りであります。が、經水の自然的排出の期に至りましたからとて、一時に開放流出せしむるが如き事なく除々に其緊縮を弛めて排出をなしますが故に、經水が三日乃至七八日を費して、始めて閉止するといふ状態でありますから、同じく其常態たる緊縮の狀に復しまするにも、又極めて緩漫でありまして、其人によりて多少の差異はあれども五日乃至八日間位を以て復舊するのであります。即ちこの復舊の期間（月經閉止の翌日より七日間位をいふ）こそ精液の子宮内に進入して妊娠せしむる唯一の時期なりと申すのであります。著者が此時期を名づけて必然的の

懷妊期と稱し、其他の日を不妊日と申すのでありますから、懷妊を欲せざる人はこの期間さい避けますれば決して妊娠をしないのであります。何となれば括約筋が次第に其緊縮の度を加へて他物の進入を絶体に拒斥して居るからであります。世には此括約筋が交接の美感により自然に開口して精液を迎ひ入るゝに非る乎との説をなす者もありますが、這は甚だ信じ難きの説であります。何故かと申しますれば本筋はかくの如く吐嗟の間に開閉する如き鋭敏なる機能に非ずして、極めて遲鈍なる性質の物であるからであります。今一步を譲りて仮りに微妙なる快感の爲に開口すると致しますれば、經水排出期の前日又前々日等

には子宮内に幾分漏出してゐます處の經水は之が爲に其流出を免れないではありませんか、著者が本件に關し多年研究調査してゐますが、未だ曾てかゝる變例を耳にしたることはないのではありません、夫から此反對に月經の中間に交接を行ひますれば必ず妊娠するに至るのであります、這は言ふまでもなく本筋の弛緩によりて精液の進入を容易ならしめて居るからであります、けれども之には種々の害毒が伴ひますから、此舉は深く慎まねばならないのであります、之につきて一場の喜劇があります。

昔徳川氏の代に或諸侯の家臣某か江戸屋敷勤番の命を承けて將に發せんとす、時に婦人産褥中にあり、某婦人を顧み

て曰く三年又汝の愛を見る能はずと遂に褥中に入りて交驩す、後數月腹部の膨張著しきに至り、舅姑之を見て大に驚き且つ怪しみて其不義せるに非るやを責む、婦人曰く斷じてなし之全く郎君の種なりと、舅姑尙信せず、使を江戸に遣はして之を某に告ぐ、某曰く老親敢て憂ふること勿れ余か心に之を知れり願はくは妻をいたはりて余の歸郷を待たれよと、老親聞て啞然たりしとは一寸滑稽の様な、しかも眞の事實でありました。

夫から第二に申し上げますことは、天地間の自然現象が陰微の間に、人体に及ぼすの大作用であります、實は之が著者の最も若心致しましたる處の最大秘訣の研究でありまして、又眞に獨



創の見地であると自負しておるのでありますから、御高覽の上、充分の御批評を願ひます。

さて何をか自然現象といふ、曰く、天体の吾この地球に及ぶす引力の作用であります、即ち太陽は其巨離が非常に高遠なのでありますから、其感應も稍微弱であります、月は其形体こそ大ならざれども天体中我この地球に最も近接しておるのでありますから、其感應は又極めて顯著なのであります、彼の海水の満ちを生ずるは悉くこの月の引力作用に據ることは、皆人の知る處であります、更にこの日月の両引力作用が人体に及ぼすの範圍いかんと申しますれば、又其關係は極めて重大であ

りまして、生も、死も悉くこの大作用を受けておるといふこととであります、今實例を擧げて之を説きませう、曾て著者の祖父八十余歳の高齢となり老衰病に罹りましたるとき、主治醫の申されますには、病漸く篤し今夕瞑目せらるべしと、時に傍に祖翁の知人にして又八十余歳の老翁がりました、耳語して曰く、否、今夕ではありますまい、明朝寅の刻でありますやと、果して其言の如くでありました、著者大に之を怪しみ、翁に就きて之を尋ねました處が、翁の曰く、醫は現在を知れども自然を知らないからであります、と、著者益々之を怪しみて、重ねて翁に自然とはいかんと尋ねますれば、翁の曰く、潮水満

ち來れば人生れ、潮水退き去れば人死す之自然の法なりと説  
 き論されたり、後數年著者命を奉じて某地の役宅に住してをり  
 ました時、荆妻始めて産をなすといふのでありましたから急  
 ぎ老産婆を迎ひて之を診せました處が數刻を経るも猶産の紐を  
 解かず、著者心に之を焦燥まして、老産婆に尋ねますれば、産  
 婆の曰く未だし明朝天明の頃にならざれば出來ますまいと、著  
 者此處に始めて疇昔の老翁の言を思ひ出しまして、成る程と、  
 爾來幾多の死者、幾多の産婦につきて之を驗しまするに、二三  
 の特異者を除くの外は、悉くこの天則に洩れないのでありま  
 した、著者は此處に於てか、人体の血行運動も、呼吸作用も皆

この大自然の天則に合致しておらないものはないといふことを  
 發見したのであります、夫から進んでこの天則が生殖作用に及  
 ぼすの道はいかんと、密かに之が研究を重ねました處が潮水満  
 ち來れば凡て排出作用となり潮水退き去るの時は凡て吸収作用  
 となるのであるといふ事が解せられたのであります、されば滿  
 潮の時には排出作用となるのでありますから、精液の進入を妨  
 げられまして不妊即ち避妊となるのであります、併して干潮  
 の際には吸収作用となるのでありますから、精虫は非常の勢  
 を以て子宮内に進み入りますが故に妊娠乃ち受胎となるのであ  
 ります（但妊不妊の兩者共に括約筋の復舊期間内に於ける事の

みをいふ)

以上の二項によりて、大自然の天則と、生理的作用の大体を了解せられたる事と信せられますが、この二大原則を按排せられて適宜に之を行ひますれば、人爲的に意識的に懐妊及避妊の自由自在たるべきことを確信せらるゝのであります。

本章の終りに望んで、尙一言して置ますことは、兎角この子實が比較的貧者に多くして、富豪の輩等に少なきの傾向ありますのは、いかなる理由であるかと之を究めますれば、富豪輩は常に其富の強大なるに任せて素行修らず、酒池肉林の樂を姿にし、之が爲に往々夜を徹するが如き不攝生を極めて居るので

ありますから、其榮耀榮華の責罰にて酒精の中毒にかゝりて肝緊の精虫は非常に脆弱となつておるのでありますから、多くは半途にして斃るゝのであります、偶々卵巢に入りて受胎せしむることがありましても、生育甚だ不完全でありまして、多く流産等に終るのであります、僥倖にして月満ち生れ出ても健康者は甚だ少ないのであります、之に反して中流以下の者は其境遇が概して貪飲飽食等を許さず(例外者を除く)又身体の運動も其度に適しておるのでありますから、其精虫は極めて健全であります故に、よく受胎し、又早世夭折等の不幸者の少ないのであります、此点より觀察しますれば貧者富者何れか幸

福なるやを判ずるに苦むのであります、讀者深く之を察せられよ、天は人に二物を與へずとはこの邊の意か。

次に月の出入と潮水の満干を生ずるの時差表を掲げて、之を説明したのであります。余りに余談に流るゝの恐れがありますと、又一つには神部署にて發行せられます處の畧曆には日々の満干を記してありますから、之を省畧致しますが故に、潮の満干は凡て畧曆に就きて見られんことを希望致しておきます。

### ● 分娩日の算定法

古歌に曰く「大般若波羅密女の祈禱かな一二は過ぎて産の紐

とく一と、さて此分娩日の數へ方と申しますのも、種々あります。が之は著者の新論でも何んでもありません、皆古來よりの傳説でありますれば、其中二三の分り易きものを選びてお知らせ致します。

就て先づ第一に決定しておかなければなりません事は、受胎より分娩に至る迄の日數であります、之は普通の人にあります。ては今日の處畧二百八十日乃ち四十週と定められ生理學上でも此説に據つて居るのでありますから、本章に於ても之を本則として申述ますが偶には之より二三日早きもの或は一兩日後るゝ者もないではありませんが之は例外としておきます。

一 其月の經水の閉止たる第一日より三ヶ月を減し七日を加ふるのであります、例へば四月一日に經水閉止たるときは其四月より三ヶ月を減し七日を加へて翌年の一月八日を分娩日と算定するのであります。

二 前項の反對に經水の閉止たる、月日に九ヶ月と七日を加ふるのであります、例へば經水が五月三日に閉止たるときは九ヶ月と七日を加へて翌年の二月十日と算定するので方法あります。

三 は經水の閉止たる月日を忘れたるときに數ふるの方法であります、之は誰でも普通には受胎を感せずして翌月に至り

經水の排出なきを見て始て驚きて受胎せし事を知るが如き場合において、以前の經水閉止日を記憶致しませんときに、胎動といふものにて之を算定するのであります、胎動とは胎兒が始て其位置を變換する爲に動くのであります、著しく母体に感するのであります、この胎動は即ち受胎の日より第二十週目に起るものと一定しておるのでありますから、この胎動の翌日より數へて二十週目は取も直さず二百八十日の満限にして分娩日となるのであります。

● 男女の豫知法

古歌に曰く『生るれば男子おんなの差別なく可愛さ同し我宿の子は』と、この男女を豫知する方法も古來より種々の研究説がありますが、先づ佛説の道藏經に在るを見ますれば、經水閉止で一日三日五日は陽氣盛にして陰氣伏す故に男を生じ、二日四日六日等は陰氣盛にして陽氣伏す故に女を生むべしとあります。

次に東垣といふ人の説には、月水絶えて後一兩日は血海始て淨し故に精其血に勝ちて感ずるものは男を生じ、月水閉止で四五日を経れば血海已に旺す故に精其血に勝たずして感ずるものは女となる、六七日の後は孕むことなしとあります。

次に現今の醫學上では心音によりて、之を判定する方法であります、心音とは胎兒の心臟の鼓動であります、之は大低五ヶ月以後には聴取する事が出来るのであります、心音百四十以上なれば女子にして之より少なき時は男子なりといふのであります、何故かと申しますれば普通男子は七十前後にして、女子は八十前後であるといふ自然の法則であります、併して胎兒は其倍數より稍少なきを本則となすからであります。

次に俗間に行はれてゐます處の一二を記して見ますれば、夫婦の年齢に一年内に妊娠期を終るべき者なれば一を加へ二年に渉る者は二を加へて其總數が奇數なれば男にして偶數なれば女

である、又其總數を三で割りて割り切れれば女子にして余りを生ずれば男なりと、夫から女子が左を下にして男子に交れば男を孕み右を下にすれば女を孕むとか、又晝間の交接は男を生じ夜間は女を生むとか、左孕みは男子にして右孕みは女であるとか、又夫婦の何れにても其勢力の偉大なる方に感じて男となり女となるとか、又妊婦を南に走らして不意に之を呼止めし時左を向けば男にして右を向けば女なりといふ類であります。

最後に埃國維納大學の教授にして有名なる生理學者シエンクといふ博士の妊娠論には、懐妊は必ず強壯活潑なる精虫を作るを要す、この強壯活潑なる精虫を作るには多くの滋養物を体内

に取るの要あると同時に又其作用も充分慎みまして、精虫の完全なる發達を遂げしむる爲一週一回以上に渉らざる事を肝要となすとの事であります、讀者乞ふ再思せよ。

### 懐妊及避妊の秘訣終

278  
419

大正四年九月廿八日印刷  
大正四年九月廿十日發行

定價金四十錢

東京市小石川區宮下町四十一番地

著作兼發行者 長谷川 月 嶺

東京市神田區一ツ橋通町十五番地

印刷者 坂 田 作 藏

同印刷所 盛 明 舍



東京市本郷區森川町四十七番地

發行所 中央圖書出版社

電話 下谷 七〇九二番



終

